斎藤茂吉遺骨埋骨式体験記

竹内　正（日本歌人クラブ会員）

一　発端

平成二十三（二〇一一）年に北杜夫さんが急逝して五年目の平成二十八（二〇一六）年の秋、信州大学附属中央図書館において「没後5年北杜夫展――作品に描かれた信州松本――」が開催され、見学する機会があった。その前年、平成二十七（二〇一五）年には斎藤家より、北さんの蔵書六百冊以上が本図書館に寄贈され、「北杜夫文庫」も創設されていた。見学では、当時副館長であった村田輝様のご案内で、北さん自筆の短歌の掛け軸やエッセイ原稿と出会い、更には「北杜夫文庫」にも入室見学をさせていただいた。また、医学部のスピンオフ展示「作家・北杜夫ってドクターだったの?!」も拝見した。いずれもいずれも、北さんの面影を彷彿とさせる興味深いものばかりであった。見学を終えたところで、村田様より北杜夫作品についての原稿のご依頼をいただいた。若い頃より趣味の短歌を詠みながら、北さんの作品に親しんできたささやかな歩みの一端をまとめる機会にと思い、お引き受けすることとした。今年度で八回目の投稿となる。

思えば、北さんとの交流は大学時代の卒業論文[1]のテーマを北杜夫とした時からであった。読むほどに引き込まれていく多彩な作品の文体、ユーモアと叙情性、一方で西洋風なロジックとそれを支える膨大な知識等、その魅力に惹かれ北さんを、ただならぬ人と思った頃が懐かしい。大学四年の秋、北さんにお会いしたいと思い、初めて手紙をお送りしたところ、お返事をいただいた。

（前略）今、ウツです。南米移民の長篇に第一部が終り、来年一月末に本になります。それから申訳ないのですが、今のところ面会謝絶にしております。お元気で　がんばって下さい。北杜夫

その後、様々な機会にお手紙をお送りし、三度ほどご自宅に伺い面識の機会をいただいたこともあった。北さんの作品に最初に出会ったのは中学時代であったことを思うと、かれこれ半世紀が経ったことになる。時の流れの速さを感じる。

母親の影響で短歌を趣味としてきた私は、北さんのお父上である斎藤茂吉の短歌にも親しんできた。北さんが亡くなり三年が経ち、かねてから一度は茂吉の原点となる山形を訪れ、往時の茂吉や北さんの郷愁に触れてみたいという思いが募り、ついに平成二十七（二〇一五）年の春、初めて山形を訪れた。上山では「山城屋」「斎藤茂吉記念館」、金瓶の「茂吉生家」「金瓶学校」「宝泉寺」等を見学した。

茂吉生家の庭には立派な松が生い茂っており、その立て看板には

「最上川の松　命名北杜夫　由香」と筆字で書かれていた。宝泉寺では、茂吉のお墓に墓参させていただき、その後お寺からほど近い茂吉の母の火葬場跡を訪ね、歌碑に手を合わせた。実際その場に立ってみると、「死にたまふ母」（『赤光』）の連作が思い出された。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ

（『齋藤茂吉全集　第一巻』（「初版赤光」「死にたまふ母」より）

その日は、茂吉ゆかりの肘折温泉に一泊し、茂吉が入浴したという湯船にしみじみと浸かった。翌日は、茂吉が疎開した大石田を訪ね「聴禽書屋」を見学した。二階には「千慮必有一得」（史記）の額が当時のままに飾られており、庭には茂吉の好きだった翁草が群れていた。その後、茂吉がよく散策したという最上川のほとりを散歩し、乗船寺にある茂吉の墓[2]に墓参した。

この最初の山形行は、茂吉作品の原点に触れる体験であり、同時に、旧制松本高等学校時代の北さんの山形での足跡をたどり、この親子二人の当時の暮らしぶりを理解する上で貴重な旅となった。

その後、平成二十九（二〇一七）年、先の信州大学の論文「松本時代の北杜夫　其の一」発行の際、ご紹介の葉書を斎藤茂吉記念館にお送りしたところ、自宅に「斎藤茂吉記念全国大会」[3]のご案内を送っていただいた。以来『斎藤茂吉記念歌集』に詠草を投稿するようになり、毎年楽しみの一つとなっている。

山城屋にて

最上川の松

火葬場跡

翁草

このように、山形を身近に感じるようになってきていた私であったが、「生誕１４０年第48回斎藤茂吉記念全国大会」のご案内が届いた令和三（二〇二一）年の年の暮れ、以下の記載を見て、非常に驚いた。

全国大会の主な行事

○　斎藤茂吉の遺骨埋骨式[4]

10：00～10：30（宝泉寺／上山市金瓶地区内見学自由・墓参可）

※9：30からの墓前行事は関係者のみとなります。（以下略）

更に、申込書の隣「斎藤茂吉の遺骨埋骨式について」には以下のような説明があった。

斎藤茂吉の次男北杜夫（斎藤宗吉）が、保管していた茂吉の遺骨の数片を金瓶宝泉寺境内の茂吉の墓に埋骨します。親族・関係者が埋骨する際に自由に見学していただき、埋骨式終了後は墓参することができます。北杜夫が遺骨を納めていた仏壇等については撥遺式（魂抜き）を行い、茂吉記念館内集会室に展示しています。

この説明を読み、私は北さんの私小説「死」（『北杜夫全集　第五巻』新潮社）の一節を思い出した。「死」は、茂吉の臨終前後について、自身の仙台での生活や心境を克明に描きながら、茂吉との忘れられない思い出を回想し、科学的、即物的な筆致で描いた作品であった。昭和三十九年三月の「世界」に発表した当時は賛否のあった作品で、文芸雑誌の対談では酷評されたこともあったが、川端康

成からは賞讃の手紙をもらったと、北さんは「創作余話（1）」（『北杜夫全集　第五巻』付録月報1）に記している。

私はなお東京に八日間いた。一夜、そっと骨壺をあけ、父の骨の四、五片をとりだして紙に包んだ。それを持って、私は仙台に戻った。（P.242）

また、『或る青春の日記』（中央公論社）、『茂吉晩年』（岩波書店）等にも以下の記述がある。

三月十日　章二、ほかの子供と隣家のニワトリを棒で打ち殺す。「夜になるとニワトリが化けてくる？」夜、一人でそっと骨壺をあけ、父の骨の四、五片を紙につつんだ。ひそかごとである。（「昭和二十八年」（PP.438-439））

三月十日。「夜、一人でそっと骨壺をあけ、父の骨の四、五片を紙につつんだ。ひそかごとである」（Ⅱ「「つきかげ」時代」（P.273））

改めて作品に目を通しているうちに、茂吉と北さんからいただいたご縁を大切に、これは、ぜひ再び山形に行き、遠くからでも埋骨式を拝見し、墓参させていただこうと思い立ち、詠草の投稿とともに、斎藤茂吉記念全国大会への参加申込書を送ったのであった。

二　経過

山形の全国大会への参加を決め、遺骨埋骨式の見学、墓参を思い立った私であったが、まさか実際に埋骨式に参列させていただくことになろうとは思ってもみないことであった。これまでの経過を振り返ってみたい。

平成二十三（二〇一一）年の秋、北さんが亡くなられた後、奥様、由香様とは何度かご交流の機会をいただいた。また、先の信州大学の論文をお引き受けして以来、お二人には原稿や資料のご相談を度々させていただき、ご丁寧な対応をいただいてきた。

平成二十四（二〇一二）年五月十九日には、明治神宮参集殿にて日本歌人クラブ定期総会が開催され、由香様のご講演「どくとるマンボウ家の素顔」を拝聴した。ご講演は、茂吉と輝子さんとの出会いに始まり、輝子さんが七十九歳で南極、八十歳でエベレストと、世界百八ヶ国を旅したお話。また、北さんの躁うつ病の際のテンヤワンヤなご家族の様子等を、ユーモアを交えて楽しくお話しくださった。一方で、急逝された北さんについては、ご無念な日々のお話もお聞きした。講演会後のご挨拶では

「ああ、竹内さん。長年ありがとうございます」

と面識の機会をいただき、親しくお話しすることがあった。

平成二十六（二〇一四）年八月には、お偲びのお手紙をお送りしたところ、由香様よりお返事と北さんの書斎のご著書（『マンボウぼうえんきょう』と『青春詩集　うすあおい岩かげ』）を送っていただいた。特に『青春詩集　うすあおい岩かげ』はその後、信州大学の「松本時代の北杜夫」の研究を進めていく上で大切な資料であり、北さんが研究の方向を示してくださったような気持ちになった。

平成二十八（二〇一六）年には、山梨県立文学館にて、「企画展北杜夫展　ユーモアがあるのは人間だけです」が開催された。十一月三日には、「北杜夫は3人いました―喜美子夫人が語る波乱の50

年」のトークが開催され、講堂で喜美子様、由香様、館長の三枝昂之様のお話を拝聴した。当日の展示見学では、奥様、由香様とお会いでき、ご挨拶をさせていただいた。企画展はテーマごとに年代順に展示されており、豊富な資料とともに多面的な北さんの文学活動を浮き彫りにしていた。展示の中には松本時代にゆかりのある「憂行」の印や「憂行日記」「少年」草稿、「幽霊　第一章原稿」等、貴重な資料が多く、見入ってしまうものばかりであった。

その後、令和三（二〇二一）年には由香様より、軽井沢高原文庫における睡鳩荘の朗読劇、「北杜夫作『幽霊――或る幼年と青春の物語――』」のご案内をいただいた。主人公「僕」のナイーブな内面をどのように朗読劇で表現されるのか、何か新しい発見があるかも知れないと期待して申し込んだものの、新型コロナウィルス感染症の影響で中止となってしまった。由香様からは「緊急事態宣言となり、残念ながら、幽霊朗読会を中止にするそうです。おそらく事務局様からメールがいくと思いますが、とり急ぎ、ご連絡いたします。当日、母とご挨拶したかったのですが、残念です」とメールをいただき、その優しいお心遣いに感謝するできごとであった。

その後も新型コロナウィルス感染症は収束する気配がなく、令和四（二〇二二）年の年明け早々オミクロン株（ＢＡ１・ＢＡ２）が確認され、二月には第六波のピークとなった。斎藤茂吉全国大会の参加申し込みの後は、新型コロナウィルス感染状況の動向を見守る日々が続いた。五月に入りやや収束の兆しが見え始めた頃、斎藤茂吉記念全国大会事務局様に開催について問い合わせたところ、「現在、開催として準備をすすめております。ただ、万が一感染の急拡大など不測の事態が起き、開催が困難と判断した際には、参加予定の方々に対しまして、早急にご連絡差し上げます」とのことであった。

そこで、五月五日、由香様に全国大会参加の意向をお伝えしたところ、由香様より前日から当日の日程の中で「是非、母とどこかでご挨拶できればと思いますが、どこかでお時間ございますか」とメールをいただいた。更に、斎藤茂吉記念館に当日の日程を確認してくださり、「五月十五日（日）、宝泉寺で九時三十分～九時五十分、墓前行事があります。予備席がございますので、万が一、ご興味があればお席はございますとのことです。宝泉寺の前に駐車場があり、そこに車がおけるそうです。また十時～十時半、宝泉寺で埋骨式があり、ご参加可能です」と詳しい日程に加え、ありがたいことにお席のご案内までいただいた。軽井沢高原文庫の朗読劇中止という残念なお話もあったので、墓前行事、埋骨式、いずれも、貴重な機会と考え、ご厚情に甘えさせていただき、謹んでご同席させていただきたい希望をお伝えした。

三　全国大会前日

令和四（二〇二二）年五月十四日、新型コロナウィルスの第六波は減少傾向にあった。斎藤茂吉記念館からの全国大会中止の連絡もなかった。朝のうちは、梅雨前線の影響で太平洋側を中心に雨雲が覆う日であったが、私は七年前のルートで、再び山形に向け早朝自宅を出発した。途中新潟では一時雨が激しく降ったが、小国街道を通るころには天気はすっかり回復していた。

斎藤茂吉記念館[5]には昼過ぎに到着した。由香様との事前のメールでは、奥様と由香様は前日、記念館にて埋骨式の打ち合わせがあり、前日に記念館を見学する私との予定と重なり、「お会いできるかも

知れませんね」とのことであった。受付で簡単に自己紹介をすませると、由香様からという封筒を受け取り、受付を通していただいた。中には、記念館のパンフレット、「斎藤茂吉記念館図録」、開館50周年記念の切手シート、梧竹臨写帖書画のクリアファイル、そして美しい一筆箋が二冊入っていた。

まもなく、由香様と奥様が記念館に到着されるころかと思いつつ、ロッカーに荷物を入れ、館内を見学することとした。まず、受付を過ぎて一階集会室には、茂吉が晩年を過ごした居間兼寝室・書斎がエピソードとともに再現されていた。ご家族の紹介コーナーも新設されており、北さんのお顔も飾られていた。ふと後ろを振り向くと、展示戸棚の目線よりやや上の方に、北さんが自宅の押入れにひそかに保管していたという茂吉の遺骨をしまっておいたウィスキーの箱と小さな仏壇が展示されていた。しばらく言葉を失って見入ってしまった。茂吉が逝去した昭和二十八（一九五三）年、東北大学医学部を卒業され、インターン実習のころの北さんや、「死」の一節が思い出された。

――少年時代から横暴で身勝手な父親をおっかなく、煙ったく、多少恨みがましく思っていた北さんであったが、昭和二十年終戦の年に大きな変化があった。一月、松本高校に合格し、五月二十五日の空襲で家も標本も焼かれてしまい、ひとまずは小金井の親戚宇田家のお世話になった。そこでたまたま見つけた父の歌集『寒雲』をもらって信州松本へ発った。それまでほとんど文学書を読まなかった北さんであったが、父の歌を読み、北さんの父親像はおっかない父親から歌人茂吉に大きく変貌していった。松本に来てからも自選歌集『朝の螢』を読み、七月になると茂吉の疎開先の山形で『赤光』『あらたま』と出会った。松本時代の父への思いは、茂吉愛好者、ひそかな崇拝者へと変化し、その後もその思いは変わらず仙台時代へと続いていった。おそらく、当時北さんが茂吉の遺骨に抱いた思いの一つには、唯一無二の優れた表現者としての父への強い憧れや、いつまでも自分の文筆活動を傍で見守っていてほしいという強い願いもあったのであろう、と思いをめぐらした。

その後、ゆるやかな階段を下りて地下の展示コーナーを見学した。守谷夫妻記念室、映像展示室と見学し、常設展示室の茂吉の書を見学していると、記念館の学芸員さんに声をかけられ、館長室に案内していただいた。

館長室には、奥様、由香様、秋葉四郎館長様（元日本歌人クラブ会長）、そして斎藤茂一様（茂吉の長男・茂太の息子、斎藤病院常務理事）ご夫妻がおられた。緊張しながら、まずは皆さんと名刺を交換させていただき、自己紹介をすませたところで、奥様から改めて「長年、主人の作品では、ありがとうございました」

とご挨拶があり、お菓子をいただいた。恐縮しながら、これまでの北さんとのご交流の思い出や、信州大学の論文のこと、斎藤茂吉文学館の感想などをお話しした。短時間ではあったが、皆さんと終始和やかに面識の機会をいただけたことに感謝し、学芸員さんと館長室を退室した。

再び地下展示室に戻り、常設展示の続きを見学した。改めて茂吉の人生を見ていくと、前回七年前の見学の時以上に、茂吉の偉大さが感じられた。今回は特に茂吉の書画に惹かれた。茂吉は幼少期から絵や習字が得意だったというが、作品には、栗や蕗の薹や南瓜、猫柳等、生き生きと描かれ、味のある茂吉特有の筆跡で短歌が添えられている。生涯「寫生道」を求め貫き通した、壮絶な茂吉の命が甦ってくるような展示であった。

茂吉翁胸像前

見学をしていくと、明日の打ち合わせを済ませられたのであろう、奥様と由香様が常設展示室で見学していらっしゃった。

「先ほどは、ありがとうございました。お土産をお渡ししたいのですが……」

とお声をかけると、由香様が一緒に一階に来てくださった。階段を上りながら、

「栗はお好きですか」

とお聞きすると、

「もちろんです」

と嬉しそうに答えてくださった。玄関の正面にある茂吉翁胸像とご一緒に写真を撮っていただき、明日の納骨式についてお話し、お別れした。

その後、明日の会場となる宝泉寺を訪ね、ご住職と七年前の訪問を懐古しながらご挨拶し、全国大会前日の予定を終えた。

四　斎藤茂吉遺骨埋骨式（全国大会）当日

令和四年五月十五日朝九時、宝泉寺境内入口には「斎藤茂吉記念全国大会墓前行事会場」の立て看板が設置されていた。少年茂吉が尊敬していた佐原窪應和尚が中林梧竹に揮毫を依頼したという「金峯山」の額を仰ぎ山門をくぐると、ピンクまじりの白躑躅が満開に咲いていた。既に境内には関係者や報道陣、見学者が大勢集まっており、受付も終わっているようであった。関係者らしき方に、

「長野から参りました竹内と申します」

と声をかけさせてもらうと、

「長野の竹内さんです」

と受付を呼んでくださり、前日茂吉記念館でお会いした学芸員さんに本堂へ案内していただいた。

墓前行事の法要は予定通り九時半に始まり、奥様、由香様、斎藤茂一様ご夫妻が見守る中、主催者の山形県、上山市、上山市教育委員会、斎藤茂吉記念館をはじめ、多くの関係者が集い、粛々と進められていった。最初に、司会者から今回の遺骨埋骨式の経緯が紹介された。その後、ご住職のお経があげられた。私は、読経に耳をかたむけながら、茂吉と北さんの深い絆に思いを馳せていた。

――昭和二十年、終戦の年の七月、旧制松本高等学校一年の北さんは、せっかく入った思誠寮であったが、食糧難で一時閉鎖されてしまった。そこで北さんは茂吉の疎開先の当地、金瓶村を初めて訪ねた。松本高校入学当時、茂吉の『寒雲』『朝の蛍』に感動した北さんは、この地で『赤光』『あらたま』と運命的な出会いをし、益々茂吉を尊敬するようになり文学に覚醒していくのであった。

――昭和二十一年一月（冬休み）には、上山の叔父（高橋四郎兵衛）が経営する山城屋を訪ね、屋根裏部屋で過ごした北さんであったが、一月三十日に茂吉が金瓶から大石田（二藤部兵衛門の離れ「聴禽書屋」）に移ると、北さんは東京に帰る前に、大石田の茂吉の元を訪ねたのであった。茂吉の日記（二月十九日）によると、最上川の川縁を「宗吉と散歩」とある。茂吉は『白き山』の絶唱「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」の情景を北さんと一緒に見たかったのかも知れない。またその後、北さんが夏休みに大石田を訪ね、生まれて初めて茂吉が歌を作っているさまを目にした際は、「彫像のように身じろぎもしなかった」「全身をしぼるようにして考えこんでいるさまは、私にやるせないような感慨を与えた」（『茂吉晩年』）と茂吉の苦吟の姿を記していた。

――昭和二十三年東北大学医学部に合格した北さんは、短歌から詩、掌篇へと表現方法を変えながら、将来は文学を志す医学生となっていった。大学時代の北さんは、晩年の茂吉と毎年夏は箱根強羅の山荘（「童馬山房（どうばさんぼう）」、現在は斎藤茂吉記念館の敷地内に移築されている）で二人きりで暮らした。北さんは、茂吉の身の回りのお世話、食事や洗濯一切を一人でやった。茂吉は北さんが仙台に帰るのをしきりに延ばしたがって、「宗吉が行くと、やはり寂しくなる」と言われ辛いこともあったという。

――茂吉晩年の歌集『つきかげ』には北さんを詠った短歌がある。

八月も今し盡きむと山家（さんか）なる雨のゆふぐれ次男炊事をする

豪雨ふる山の家にて炭火ふくわが口もとを次男見てゐる

次男と二人よひはやくより寝（いね）むとす電燈つかぬ一夜の山の中や

孫太郎蟲の成蟲を捕へ來て一日（ひとひ）見て居りわれと次男と

仙臺の宗吉よりハガキのたよりあり彼は松島を好まぬらしも

お経を聞きながら、とりとめもなく、これまでの茂吉と北さんのエピソードを思い浮かべていた。そして、この貴重な法要に参加できることをありがたいと思い、本堂須弥壇の前に置かれた茂吉の戒名「赤光院仁譽遊阿暁寂清居士」と遺影、そしてお骨袋を見守った。北さんの茂吉への深い敬愛の象徴でもあった遺骨数片がこれから安

置されること、奥様や由香様の心中をお察ししていた。

本堂での読経が終わると、司会者からいよいよ遺骨埋骨式のアナウンスがあった。

「この後は、遺骨埋骨式となります。皆様、外の墓前にご移動ください。尚、ご遺骨の撮影はご遠慮ください」

本堂を出て右側の松の隣には茂吉の歌碑が立っている。改めてその一首を読むと、かつて宝泉寺の隣にあったかやぶき屋根の生家の屋梁を見上げる茂吉が目に浮かんだ。

のど赤き玄鳥(つばくらめ)ふたつ屋梁(はり)にゐて足乳根(たらちね)の母は死にたまふなり

（『齋藤茂吉全集　第一巻』（「初版赤光」「死にたまふ母」より）

歌碑の前を通り、本堂の西側には小さい更地があり、正面には窪應和尚のお墓があった。茂吉のお墓は窪應和尚の左隣に馬酔木やアララギに囲まれていた。墓前に移動すると既に、茂吉が自ら揮毫した「茂吉之墓」の墓石は更地の横に移動され、墓穴がぽっかりと開いていた。少し近づいて見ると、骨壺らしき白っぽい蓋のようなものが見えた。

マスク姿のスタッフの皆さんが慌ただしく焼香の準備や椅子の配置など会場の設営を進める中、何人もの報道関係者がカメラを構えてその瞬間を撮ろうとしていた。ふと見ると、私が立っている更地の目の前に、椅子一脚が置かれている。しばらくすると、そこに杖をつかれたスーツ姿のご高齢の小柄の紳士が腰を掛けられた。どなただろうと、マスクのお顔を横から拝見すると、それは岡野弘彦氏であった。数々の受賞歴があり歌会始の選者でもあられた現代を代表する歌人岡野氏は、今回の茂吉記念全国大会の「第三十三回斎藤茂吉文学賞」の受賞者として隣席されたのであった。その岡野氏の後ろでご一緒に、茂吉の墓の前で埋骨を見守ることができる邂逅をありがたく思った。

穴の開いた茂吉の墓の前には、小さなテーブルが置かれ、その上には紺色のビロード布が敷かれていた。そこに、宝石ケースのような平たい濃い紺色のビロードの折敷が置かれ、茂吉の遺骨が五片ほど横一列に並べられている。心の記憶にしっかりと焼き付けておきたいとしばらくじっと見つめていた。これこそが六十九年前に亡くなられた茂吉の遺骨かと思うと、茂吉が目の前に現れ、しわがれた声で「信州から遠路よく来られましたなあ」と語りかけられたような、不思議な感覚をおぼえた。北さんはこれらの遺骨をどれほどの思いを抱いて筐底に置いておられたことであろうか、あらためて想像する光景であった。そのテーブルの前には、斎藤茂一ご夫妻、奥様、由香様がお並びになっていた。

まず、埋骨に先立って司会者より埋骨の進め方について説明があった。続いてご住職のお経があり、ご遺族の埋骨となった。最初は、斎藤茂一ご夫妻が白い手袋をつけて前にお進みになり、ゆっくりとご遺骨を持たれ、墓前に膝を折り穴の中にご遺骨を納められた。続いて、奥様と由香様が、そして、歌人からは雁部貞夫氏、秋葉四郎氏が納骨をされた。納骨が済んだところでお経があり、つづいてお焼香となった。お焼香も、納骨された方々が順番にされた。最後にご住職がお経をあげられ、埋骨式が終りとなった。

司会者より、

「以上で、斎藤茂吉遺骨埋骨式を終了いたします。尚、ご参集いただいた皆様も、ご焼香ができますので、ご希望の方はお焼香なさってください」

とアナウンスがあった。

埋骨式を見守っておられた方々が、順次お焼香をされる中、岡野氏がお焼香をされ、徐々にお焼香の方も少なくなっていき、私もお焼香をさせていただいた。ふと見上げると、お墓の西側には代掻きを終えたばかりの田圃が広がっていた。その向こうには、茂吉の母の火葬場跡の黒い歌碑が小さく見えた。私は『赤光』の茂吉が母を荼毘に付した時の五首を思い出していた。

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くもぞ燃えにけるかも

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり

蕗の葉に丁寧にあつめし骨くづもみな骨瓶に入れしまひけり

どくだみも薊の花も焼けぬたり人葬所の天明けぬれば

（『齋藤茂吉全集　第一巻』（「初版赤光」「死にたまふ母」より）

茂吉は「作歌四十年」の「赤光抄」に以下のように述べている。

火葬場は稲田のあひだの凹處を石垣を以て圍ひ、棺を薪と藁で蔽うてさうして焼くのである。火は終夜燃え、夜の明け放つころにすつかり燃えてしまふのである。（『齋藤茂吉全集　第十巻』）

焼香を終え、墓前の人びともまばらとなる更地に立って、しばらく遠くの黒い歌碑を見ながら、当時の茂吉の心情をくり返し想像していた。

大正二（一九一三）年の五月に母の遺骨を拾った茂吉は、昭和二十八（一九五三）年二月二十五日に逝去し、五月に宝泉寺に分骨埋骨された。そして、今回令和四（二〇二二）年五月に北さんが保管していた最後の茂吉の遺骨がようやく埋骨された。この度は、たまたま北さんとのご縁で、六十九年前の茂吉の遺骨を拝見する機会をいただいたが、このような体験はまさに奇跡としか言いようがない。ただただご令閨喜美子様と由香様のご厚情に感謝するばかりである。

五月十五日、梅雨の晴れ間の光の中で、白く輝く茂吉の遺骨を見ていると、改めて、当時の北さんの父茂吉への思いに触れさせていただくと同時に、百九年前に茂吉が母の骨を拾った悲しみが、再び甦ってくるようにも感じられた。北さんの茂吉への思いと、茂吉の母への思いが時空を超えて、金瓶の大空に交響曲を奏でているように感じる体験であった。

埋骨式を終えて宝泉寺山門を出ると、左手の金瓶学校が自由見学できるらしい。保存会の方々が温かく案内してくださった。明治十五（一八八二）年五月十四日に生まれた茂吉は、七歳から九歳まで金瓶学校に学んだ。学校は当時のままに残されており、天上には太い梁が架けられ、木製の二人掛け机と椅子が往時を伝えていた。壁際には斎藤茂吉文庫が置かれ、餓鬼大将であった茂吉少年が遊んだ当時の地図を見学することもできた。帰り際に、保存会の方から翁草の苗を一鉢いただいた。

午後は、上山市体育文化センターにて生誕一四〇年の記念全国大会が盛大に開催された。

新緑の果たてに聳ゆる蔵王山先師生誕百四十年

茂吉翁ゆかりの宿に湯あみして三酒の利き酒一夜眠りぬ

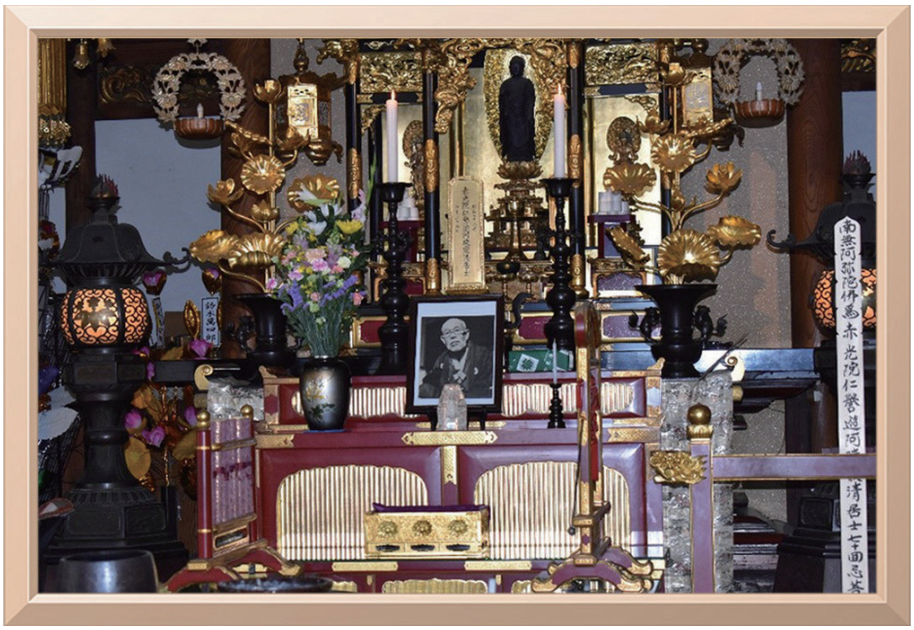
金瓶の餓鬼大将が呼びかくる声がこだます須川（すかわ）のせせらぎ

望遠をマクロに拡げ撮したり蔵王の峰の歌碑見ゆるまで

金瓶は休耕田に飛び立ちし二羽の白鷺今はいづこか

（竹内詠「没後七十周年斎藤茂吉記念歌集　第四十九集」）

宝泉寺境内茂吉歌碑



本堂須弥檀

左から由香様、喜美子様、ご住職

金瓶学校

蔵王連峰

注

(1) 竹内正『北杜夫論―初期作品における「幽霊」の位置―』（昭和五十七年新潟大学教育学部卒業論文）。

(2) 斎藤茂吉の墓は東京都青山墓地、分骨による生地上山市金瓶宝泉寺、そして乗船寺と三基存在している。

(3) 「斎藤茂吉記念全国大会」（主催／山形県・上山市・上山市教育委員会・公益財団法人斎藤茂吉記念館）は、斎藤茂吉を追慕し、地域文化の向上を目的として昭和五十年から始められ、毎年茂吉の生誕月の日曜日に、記念講演会を中心に様々な行事を開催している。また、大会事業の一環として毎年『斎藤茂吉記念歌集』を発行しており、歌歴や結社にかかわらず氏名五十音順で、応募作品全作品を掲載し、本年令和五年で第四十九集となる。その記念歌集は茂吉の墓前に供えられる。

(4) 斎藤茂吉の遺骨（埋骨式）について、「第48回斎藤茂吉全国大会」に参加した際の要項には以下の記述がある。

■斎藤茂吉の遺骨（埋骨式）について

□斎藤茂吉の遺骨

斎藤茂吉は、昭和28（1953）年2月25日に東京新宿大京町の自宅書斎にて心臓喘息により満70歳9カ月で死去し、翌26日に東大病理学教室で解剖、28日には東京渋谷の幡ヶ谷火葬場で火葬後、骨つぼ2個に分骨されました。翌3月2日に築地本願寺で葬儀・告別式が行われましたが、これ以後茂吉の遺骨は2つに別れることになります。

1つは同年3月5日に実弟の髙橋四郎兵衛（山城屋主人）が山形県の上山に持ち帰り、その年の5月24日、郷里金瓶の宝泉寺の茂吉の墓（茂吉自身が準備した笠石）前で分骨埋葬式を行っています。

もう1つの遺骨は、少しの間東京の自宅に置かれた後、同年6月4日に青山墓地の茂吉の墓が建つ場所で埋骨式を行い納骨しています。その間、自宅に置かれていた遺骨を父とまだ一緒に居たい気持ちから、茂吉の次男宗吉（北杜夫）氏が幾つか持ち出すことになりますが、このことは、北杜夫著『ある青春の日記』に記述され、さらに、茂吉の長男斎藤茂太・次男宗吉（北杜夫）両氏の対談本『この父にして』にも、持ち出してからその後の保管などについて、記述されています。

□遺骨（ママ）式に至る経緯

北杜夫氏が長く持ち続けた斎藤茂吉の遺骨（数片）は、昭和から平成を経た令和2年11月、東京都世田谷区の北杜夫家自宅2階の書斎（押入れ）に保管されていた仏壇などとともに、斎藤茂吉記念館が受領いたしました。当面は、斎藤茂吉の生家菩提寺の山形県上山市金瓶宝泉寺の境内に建つ茂吉の墓に、しかるべき日（斎藤茂吉記念全国大会墓前行事実施日）を定め埋骨することを前提に、一時に寺に安置することとし、仏壇などは撥遺式（魂抜き）を済ませて、令和3年4月下旬から斎藤茂吉記念館内で展示しております。

以上の経緯から、このたびの生誕140年48回斎藤茂吉記念全国大会が開催されるにあたり、斎藤茂吉遺族・親族、関係者と全国大会主催者、大会参加者などが一同に参集して、既に埋骨されている昭和28年5月の遺骨に加え、宝泉寺内茂吉の墓に、令和4年5月15日に埋骨するものです。

(5) 公益財団法人斎藤茂吉記念館は、東に蔵王連峰を仰ぐ金瓶の南の丘「みゆき公園」に、昭和四十三（一九六八）年に開館した。平成三十（二〇一八）年の改修により、バリアフリーの新しい時代の文学館に生まれかわっていた。近代短歌史上重要な位置を占める斎藤茂吉が残した業績や生活を伝える様々な資料が収蔵、展示されている。